

後日「六面道」と名づけた6本の道の出合う赤土斜面の坂道（これは舗装された今でも急坂であるが）を、日夏は、持っていた洋傘を杖にして息を切らし登っていく。すると「左側に眞白い飯田地方独特の蔵の白壁が見えて、そのかげに聳えた大きな、百姓家といふよりも、里の物持ちの家らしい、構への宅に出た。これが何がし氏といふ姻家で、こんどの山荘の世話をしてくれ」た家であるとある。

地元の人なら、木下敏典宅と推測がつくが、「山荘記」では「何がし氏といふ姻家」「山荘日記」でも「木家」とあるのみである。妻添側のある親戚筋にあたる木下家でお茶をいただいた日夏はさら

に百メートルばかり急坂を登り、木下が紹介してくれた伊藤政吉氏の離れに落ち着いた。「育良の山の山腰にあり、殆んどその上には人家のない頂きで（中略）東

黄眠先生が行く

「山荘日記」

北が下にひらけて飯田の市街が眼の下にうづくまる」「歩けば里余はあり、麓の街道の森のとうふ屋迄十八町の、八畳二間に台所という山荘で「山荘・大風山荘・水鶏くいなの宿」と表記される。伊藤政吉は「月並の俳諧や陶器の篆刻もする雅人である。細君と十八歳の娘、十六歳の少年との四人ぐらし。長子は召されて中支に戦ひ、

少年は病身の上に夫妻が弱いので、一家は余り丈夫でない娘中心に働いてゐる」というのが、日夏の得ていた情報であった。

当時16歳の少年であった伊藤要さん（89歳）に当時のことをうかがうと、「先生は御幣餅がお好きだった」

4

より 嶋 不濁

「風呂は、木下の家が風呂が新築したばかりだったので、ウチの五右衛門風呂ではなく、よく木下家の家の風呂を使わせてもらっていた」、また長男ばかりか次男も兵隊にとられると家が絶えてしまうかと心配した父親が多少肺病の気があった要少年を病氣療養と称して学んでいた上田蚕糸から連れ戻したのが実際だったことなど

を話してくれ、日夏のお伴をして歩いた山荘付近を案内をしてくれた。

日時の明確でない「山荘記」に続く内容の「山荘日記」はまさに日記で、8月1日から9月18日まで滞在中の朝の散歩、食物、往来した人物や書翰類、体調や目にした光景、執筆活動など日夏の行動が詳細に記録されている。

作品に登場する地元の人 は、梨瓶子や川ドクトル・光悦翁は既述、早稲田演劇博物館の印南高一（喬）や河竹繁俊、岩崎雨村は推測がつく。その他の略称は、「飯田の篆刻家岳郷」は中神姓、「旧友俊君」は野原俊助、「三丁目の兵君」は伊藤兵三、「俳山樵（子）」は松下胤実、「座光寺村北翁」は北原痴山（阿智之助）など推定できたが、畊雨子・林夫人・中家

の伯母・奥果園主矢氏・上荒町の木家の息子など不詳で、隔靴搔痒かつかさうようである。

また要さんの姉の朝美さんは、昭和20年11月頃の雪後庵での随筆「柿の木」に大風の娘さんが12月20日に雪後庵の下の家に来るという話題に対して、「予は、もっと早くにして下さい。御婚礼の後馳走をたくさん啖べたいからから」と応じる記述がある。



『風塵静寂』見返の印譜、岳郷作もあるか？